

おばあちゃん



の

コック

僕のおばあちゃんは、昔の武家屋敷に住んでいる。武家屋敷というのは、お侍さん一家が住んでいる町のこと。

ここは400年以上前の町並みが今でも残されているんだ。つまり江戸時代が残っているわけ。すごいでしょ！

えっ？おばあちゃんはサムライかって！？違う、違う。

えっ？だったらおじいちゃん！？残念ながら、違います。

おじいちゃんは、小学校の校長先生だ。つまり小学校のお殿様になるのかな、偉いんだぞ！

昔、この町には鶴亀城というなんともオメデタイ名前のお城があって、その回りは海に囲まれていたそうさ。

だから今もおばあちゃんの家から海水浴場まですぐに歩いていけるんだ。

夏休みになると、僕は妹と二人でこの町に来る。今年の夏もそうさ。今僕は5年生、妹が2年生だ。

毎日朝は宿題もせずにテレビで大好きなアニメを見て、それから家の近くでセミ採りをしたり、家の前を流れるきれいな水路でフナやメダカやサワガニを採ったりする。

午後は近くの海水浴場でひと泳ぎだ。あまり泳げない僕はいつも浮き輪でバタバタ浮いているだけだけど、でも色の黒さでは負けない。

いつも2学期になるとクラス一番の黒さに変身しているんだ。

なんと言ってもお楽しみは、おばあちゃんの作ってくれる料理やおやつだ。

おばあちゃんの作るコロッケ、かき氷、ゆでたトウキビ（とうもろこしのこと）、シュークリームなど、どこのお店のものよりもおいしい。

とりわけおばあちゃんのコロッケは格別だ。俵型で、あのUFOみたいな形をしている。

小さいけど一口で食べることができるんだ。

僕が3年生の時に、おかあさんになぜおばあちゃんのコロッケはおいしいのか聞いたことがある。

おかあさんが言うには、パン粉を細かくつぶして作るから、とてもきめ細かい上品な味になるそうさ。

コロッケとパンの関係がもうひとつよくわからないけど、言われてみると確かに上品だ。

でも美味し過ぎて、下品なほど口一杯にほおばっちゃうんだよね。

ふー。

おばあちゃんは、家の裏庭の畑でたくさんの野菜やくだものを育てている。武家なのにお百姓さんもやっている所がとても器用で尊敬できる。コロッケの材料になるじゃがいももこの畑で育ったものなんだ。

「にいちゃん、飛行機飛ばそうよ」

僕が泳ぎから帰ってきて、いつもの昼寝をしようとウトウトしていたら、妹が昨日駄菓子屋さんで買って組み立てたゴム飛行機のプロペラを僕の顔の前で回した。風の音がなんとなく涼しい。

「ようっし。じゃ、裏山の神社に行こう」

「あそこは暗くて怖いからいやだ」

妹は思いっきり嫌な顔をする。

「大丈夫、まだ2時半だから明るいよ。それに。。。」

僕は口を閉ざした。

「それに？」

すかさず妹が質問してくる。こういうことにはやけに敏感だ。

クワガタを探すというのが僕が神社を選んだ本当の理由だったけど、余計なことを言うと、妹が抗議してくるかもしれないので黙ったままにすることにした。

「それに。。。それに、広くないと飛行機を飛ばせないだろう。家の近くだと水路に入ったら、びしょ濡れになってもう飛ばなくなる」

すばらしい言い訳に、妹は納得した。

裏山の神社は、もともとお城があった場所にある。

このお城のお殿様と、それから勉強が大好きな学問の神様（菅原の何とかさん、いや、様）が祀ってあるというちょっと欲張りな神社だ。

しかも同じ境内にはお稲荷様が祀ってあって、これが全体に真っ赤で、しかもそばに立つキツネさんの顔がやけに冷静で、ちょっと怖い。

妹が嫌がるのもよくわかる。去年クワガタを見つけなければ、二度と来なくても良い場所だ。

「にいちゃん、やっぱり暗いよ」

神社につながる階段の麓で、顔を上げて妹はぼつりと言った。

手にしっかりと持っているゴム飛行機も心なしか元気がない。

「この場所は木が一杯繁っているから、特に暗いの。上に行けば、明るくなるから」

僕はそう言うと、妹の不意を突いて、だっと階段を駆け上がった。

「あ、にいちゃん、待ってよ」

妹も急いで上りだした。

「本当だ。少し明るいね」

妹は少しほっとした顔で僕を見た。僕は当然という顔で見下ろす。

「じゃ、飛ばそうよ、にいちゃん」

怖いもの知らずのいつもの無邪気さに戻った妹は、ゴム飛行機を僕に手渡す。

僕は翼を調整しながら、プロペラを人差し指で回す。

ゴムが幾重にも捻れてくる。

プロペラがもうこれ以上廻せないところまできたので僕はゴム飛行機を空に向けて放った。

「わー、飛んだ、飛んだ」

妹は上を向いたまま飛行機を追いかける。

「走るな、転ぶぞ」

僕の大声に妹が止まり振り返る。飛行機は妹を置いてきぼりにし、しばらくまっすぐに飛んで、少し左に旋回して木に直撃して落ちた。落ちた飛行機の所へ妹が駆け寄る。

「にいちゃん、今度は私。ちゃんとまっすぐ飛ばせてみせるから」

挑戦的な顔で妹が飛行機を手に戻ってくる。ちょっとムッと来た僕は、「じゃ、自分でちゃんとプロペラも巻いてな。自分で飛ばすんだろ」

そうって、去年クワガタを見つけた木に向かって走った。

「ケチ！」

妹は唇を尖らせながら、プロペラを巻き始める。

「いないか。。。」

去年見つけた場所は、木の根元にある空洞の穴だった。

そこから大きなクワガタがハサミを見せていた所を偶然見つけて捕まえたんだ。

ミヤマクワガタで、その夏見つけた一番大きなクワガタだった。

妹は、プロペラが勝手に途中で巻き戻ってしまう失敗を2度繰り返した後、ようやく巻き終えた飛行機を上に向けて放った。

落下した時にちょうどまい具合に翼は調整され、飛行機はまっすぐに飛んで行く。

「あっ！」

妹と僕は同時に声を出した。飛行機の飛ぶ先には、あの赤い建物が待っているからだ。

木々の間をまるで人が乗っているかのようにすり抜けて、飛行機は見事お稲荷さんの賽銭箱に直撃した。

賽銭箱に乗っていたお供えものが弾け飛んだ。

妹は、真っ青な顔で、事故現場に直行した。僕もクワガタのことはすっかり忘れて走っていた。

「にいちゃん、怒られる？キツネさんの祟りは凄いんだってよ。同じクラスの子が言ったもん」

妹は賽銭箱の前で振り返り、僕に尋ねた。

僕は、散らばったお供え物を拾い集めて、元の場所に戻してから、妹の頭に手を当てた。

「大丈夫だ。ほら、元通りだ。ちゃんとしてごめんなさいして、お祈りすれば大丈夫だよ。」

「ごめんなさい。許してください」

すかさず妹はお祈りを始めた。つられて僕もお祈りした。10秒位で顔を上げたら、妹はまだお祈りしていた。

僕は、手持ち無沙汰に冷静なキツネさんの顔を見ていた。よく見るとやっぱり怖い。。。

結局、妹は、3分間くらい直立不動でお祈りをしていた。

お祈りが終わると、妹はゴム飛行機を手に、帰ると言った。

僕もクワガタがいなかったのだから、妹の言葉に素直にうなずいた。

夕食の時も心なしか妹は元気がない。

デザートはおばあちゃんが作ってくれた妹の大好きなプリン。でも、笑顔がなかった。

寝る時には少し離れにあるトイレまでおばあちゃんに付いてきてもらっていた。

最近はまだ一人で大丈夫なんだからと得意げだったのに。。。

翌日は、ここから車で10分位かかる親戚のおばさんの家に行くことになった。

おばあちゃんは午前中は畑で作業をするので一人残ることになった。

妹は、おばあちゃんも一緒に行こうと必要以上に誘っていたが、

おばあちゃんは、今日はおじいちゃんが4時頃帰って来るので、

二人で楽しんでおいでと行って畑に出て行った。

僕と妹はおばさんの車に乗って出発した。車が出てすぐに妹が小さな声で話しかけてきた。

「あのね、さっき、畑の向こうに見えたの」

「見えたって、何が」

「キツネがね、こっちを向いているのが見えたの」

「本当か」

「うん、それでおばあちゃんに言ったら、犬だろうって、そう言って笑ってたの。

でも、あれはキツネだと思う」

「おばあちゃんはこの何十年も住んでるんだから、犬だって言ったんなら犬だよ」

妹が何を気にしているのか、僕は薄々気が付いていたんだけど、

僕は無視して元気に振舞うことに決めた。

おばさんの家に着いたら、妹は落ち着きを取り戻したみたいだった。

裏庭にある竹林を散策したり、おばさん特製の料理をご馳走になったりと楽しく過ごした。

ランチが済むとおばさんが、駅までおじさんを迎えに行くから、

ちょっと30分ほど留守にすると行って車で出て行った。

僕はおばさんが出て行く寸前でいつものお昼寝に入りかけていた。

ウトウトする中で、おばさんが出かける時に妹が、おばあちゃんに電話してみても頼んでいる声を聞いた。

何十回もベルを鳴らしたけど、おばあちゃんはお出なかつたみたいで、

おばさんは妹に、ちょっと買い物みたいだねと言って、受話器を置く音も聞いたような気がする。

。

電話の音で目を覚ました。おばさんからだった。電車が遅れて帰りが15分ほど遅れるとの電話だった。

時計を見るとおばさんが出発して、まだ30分程度しか経ってなかった。

部屋の中が静まり返っているのが気になった。僕は居間のテーブルの上にメモを見つけた。

『おばあちゃんをたすけにいきます』

妹の字だった。

「歩いてか。馬鹿じゃないの。キツネと戦うのかよ」

僕は、急いで靴を履いて外に出た。とにかく目の前をまっすぐに行けばおばあちゃんの家に着くはずだった。

田舎は道がわかりやすいとおばさんが言っていたのを思い出した。僕は走った。

10分ほど走った所で、妹が立っていた。ここの田んぼのあぜ道だけやけに道幅が大きくて、確かにどっちにも行けそうな道だった。

田舎にもわかりにくい道があったんだ。おかげで助かった。

「おい、なにしとるん」

僕は、ちょっと怒って妹を呼んだ。昼寝の邪魔をされたからじゃないよ。妹のことを本当に心配していたからだ。

「にいちゃん、迷っちゃった」

こんな道で迷うなら、最初から無茶するな、と怒鳴ろうかと思ったけど、やめた。

「おばあちゃんなら、大丈夫って、おばさんが言ってたろう。買い物だって」

「だって、昨日買い物に行ったんだもん、おばあちゃんと。にいちゃんが海に行ってる時に。だから今日は行かないはずだもん。

あのキツネが復讐に来たんだよ、きっと。おばあちゃんに何かをしに来たんだよ」

「よし、わかった。じゃ、走って助けに行くぞ」

僕は妹の純粋な気持ちを壊したくなかったので、信じることにした。

そして、必ず、キツネをやっつけてやると誓った。妹の手を取ると、二人で走り出した。

ブッ、ブッ～。僕が正義の味方に変身した瞬間に、車のクラクションが鳴った。

「あっ、おばちゃん。おじちゃんも」

おじちゃんを乗せたおばちゃんの車が僕らの前で停まる。

「何をしよるんね、ここで」

おばさんはちょっと驚きとあきれた顔でそういった。僕はこれまでの事情を6年生のようにきれいに説明した。

「じゃ、おばあちゃんの家に行ってみるね？」

おばさんは妹に声をかけた。妹は小さくうなずいた。

「よっしゃ。行こう」

おじちゃんが元気な声を出した。僕は車の後ろのドアを開けると妹を中へ入るように手招きした。

おばあちゃんの家には車が到着すると、妹はドアを開けて急いで外へ飛び出した。

「あばあちゃーん、おばあちゃーん」

妹の叫ぶ声と同時に玄関を開ける音がする。

「ありゃ、どうしたんね？」

おばあちゃんが不思議な顔をして台所から顔を出した。

妹はおばあちゃんの顔を見て、そのままエプロン姿のおばあちゃんのお腹に抱きついた。

「よかったね、よかったね、おばあちゃん」

妹は泣きながら、居間の窓越しに見える畑に何度も目をやっていた。

「おばあちゃんは元気だよ。大丈夫だよ。何を心配したんね？」

妹の頭や背中を包みながら、おばあちゃんは尋ねた。

「電話しても出てこないから、買い物じゃないってわかってたから、キツネに襲われたと思ったとよ」

妹の真顔をしばらく見つめてから、おばあちゃんは少し申し訳なさそうな顔をして妹と同じ目の高さまでしゃがんだ。

そしておでこ同士をくっつけながら妹にやさしく語りかけた。

「あれはキツネじゃなかよ、ちょっと顔が細長い犬よ。いつも来るんよ、朝方に」

「なんで電話に出なかったの？お昼に電話したとよ」

「お昼？ああ、ちょっと買い物に行ってたんよ。」

「だって昨日買い物に行ったよ、私と」

「パン粉を切らしてたんよ。昼前に電話があって、おじいちゃんが今日の夜はコロケが食べたいって言うからね。

それで慌てて買いに行ったんよ」

おばあちゃんはニッコリと微笑むと力強く妹を抱きしめた。

「わーい、今日はおばあちゃんのコロッケ！やったー」
僕は、これまでのことをすべて水に流して、大喜びして小躍りした。

「ただいまあ」
玄関からおじいちゃんの声がした。もう4時だ。
「ありゃ、お客さんのいっぱいね。おばあちゃんだけかと思ったら。何ね？」
おじいちゃんも驚きの表情だ。僕は今度は中学一年生のように上手に説明した。
「そうね。キツネさんが怖かったとね」
おじいちゃんは、目を細めながら妹の頭をなでた。
「ようし。じゃ、今からお参りに行こうかね。」
おじいちゃんがそういうと妹は顔を上げた。
「裏山？」
おじいちゃんはやさしくうなずいた。おばあちゃんが合いの手を入れる。
「じゃ、その間におばあちゃんはコロッケを作っておくからね」

結局おじさんとおばさんも参加することになった。今日のうちでコロッケパーティになったのだ。
おじいちゃんがお賽銭箱の上にお供え物をして、小銭を投げた。皆で拝んだ。
「もう大丈夫だ。おじいちゃんは校長先生やから、小学校のお殿様やから、おじいちゃんから頼まれたら、キツネさんも許してくれる」
僕はそういうと妹の頭をなでた。妹はにっこりとしてうなずいた。
そして、おじいちゃんにありがとうと伝えた。ちょっとだけ小学3年生に見えた。

家に戻ると玄関先から、コロッケのにおいがした。
「わあ、もうできとるよ。」
僕は一番に中へ入った。妹が続いた。
「いただきます」
「いっぱいあるけん、ゆっくり食べなさいよ」
「はあーい」
おばあちゃん的笑顔とやさしい声が今日の疲れをすべて吹っ飛ばしてくれる。

心配することがなくなった妹が、その日一番コロッケを食べた。僕は我慢してその分だけいつもより少なく食べた。
UFOみたいに不思議な形をして、とても上品な味のおばあちゃんのコロッケは、いつも僕らにハッピーエンドを届けてくれる。
おばあちゃん、いつもありがとう。

おわり